

【研究ノート】

「浦上四番崩れ」関連史跡の観光活用について

Tourism Utilization of Historical Sites Related to the “Urakami Yoban Kuzure”

猿島 周平*

Shuhei SARUSHIMA

要旨

長崎市の浦上地区は原子爆弾が投下された場所で、多くの人々が犠牲になった。現在は平和公園や被爆遺構を訪れる観光客が多く、人気観光地のひとつになっている。しかし、原爆投下前の浦上には「キリシタンの里」としての歴史があり、その中には「浦上四番崩れ」というキリシタン弾圧事件など多くの人々が犠牲になった出来事もある。そうした出来事は一般の観光客にはほとんど知られていないが、遠藤周作の小説に取り上げられるなど文学や歴史に関心のある人々には有名である。そこで本稿では「浦上四番崩れ」を中心にキリシタン史跡の観光活用について考察する。さらに、被爆地浦上について語ることがキリシタンの歴史につながることを明らかにし、被爆遺構の歴史的意義についても検討する。

キーワード：潜伏キリシタン、信徒発見、浦上四番崩れ、キリシタン関連史跡、原爆

I はじめに

長崎市の浦上地区は原子爆弾が投下された場所で、平和公園、原爆落下中心地公園をはじめとした多数の被爆遺構があり、それらは多くの観光客が訪れる県内有数の観光地のひとつである。また同時に浦上は「キリシタンの里」とも呼ばれており、浦上天主堂や大司教館、1867（慶応3）年に起きた「浦上四番崩れ」に関連する「十字架山」「本原教会」などが点在している。

現在、被爆遺構の知名度は高く、多くの観光客をひきつけているものの、キリシタン関連史跡の知名度は低い。しかし、被爆遺構そのものがキリシタンの歴史と緊密なつながりを有しており、そうした側面から捉え直すことには大きな意味がある。また「浦上四番崩れ」は日本キリスト教史の大事事件として特筆されるべきものであり、遠藤周作の文学作品等にも取り上げられている。したがって、「浦上四番崩れ」を中心と

するキリシタン関連史跡は観光資源としての大きな可能性を秘めていると考えられる。

II 浦上キリシタンの歴史

ここではまず、浦川和三郎や片岡弥吉といった浦上キリシタン史の研究者たちの著作に基づいて長崎開港と浦上のイエズス会寄進から江戸時代の禁教、弾圧、潜伏、さらには「浦上崩れ」から原爆被災に至るまでの歴史を概観する。

1. 「長崎開港」から「禁教」まで

浦川（1973）によると、浦上という地名は深江ノ浦（現在の長崎港）^{かみ}の上にあったことに由来する。古代に神功皇后が訪れた神話が残っているほど歴史は古い。様々な経緯を経て16世紀には島原半島に拠点を持つ有馬氏の領地となった。

1571（元亀2）年にキリシタン大名の大

*長崎国際大学大学院人間社会学研究科観光学専攻修士課程1年

村純忠が長崎を開港し、^{ぶんち}分知町、^{ほかうら}外浦町、横瀬浦町、島原町、大村町、平戸町の六町が造成された。そして1584（元亀12）年にはキリシタン大名で純忠の甥である有馬晴信がイエズス会に浦上を寄進し、浦上はキリシタンに関する歴史を刻み始めることとなった。その後、長崎はキリシタンの街として「東洋の小ローマ」と呼ばれるほど栄えた。1587（元亀15）年、豊臣秀吉の伴天連追放令発布によりイエズス会領長崎と浦上は没収され、さらに翌年には直轄領となった。1597（慶長2）年、西坂にて二十六聖人が殉教したが、豊臣秀吉のキリシト教禁令の効果はそれほどなかったため、その後も長崎、浦上では多くのキリシタンが信仰を堅持した。そうした中で1603（慶長8）年、ポルトガル船員によって家野郷（現在の長崎市大橋町）の浦上川の畔にサンタクラ教会が建立され浦上のキリシタンの拠り所となった。しかし、1614（慶長19）年に江戸幕府の禁教令発布により長崎の教会堂はことごとく破壊されたが、サンタクラ教会も例外ではなく1620（元和6）年に破壊された。

2. 「禁教」から「潜伏」まで

1622（元和8）年の元和の大殉教ではイエズス会神父であったスピノラ神父など55

人のキリシタンが処刑され、1633（寛永10）年には天正遣欧少年使節の一人であった中浦ジュリアン神父が西坂にて殉教した。ジュリアンが殉教した時には遠藤周作の『沈黙』（1966）に登場人物の一人として描かれているフェレイラ神父が厳しい拷問に耐えかねて棄教し、沢野忠庵という日本名を名乗らせられ、多くのキリシタンから「裏切り者」と呼ばれた。このころから徳川幕府のキリシタン弾圧はますます苛烈になった。1634（寛永14）年には長崎の町衆に出島を築造させてポルトガル人を居住させ、同年に諏訪神社の秋の大祭である「長崎くんち」を開始することによってキリシタンの一掃を図った。1637（寛永14）年から38（寛永15）年にかけて天草・島原の乱が起き、益田四郎時貞（天草四郎）率いる約3万7,000人の領民が原城に籠城して約12万の幕府軍と対決した。力攻めでは善戦したものの兵糧攻めに転じた幕府軍の前に領民は全滅した。1641（寛永18）年にはオランダ商館が平戸から出島に移転されて鎖国が完成した。そして1644（寛永21）年にマンショ小西神父の殉教によって、ついに国内の神父が不在となった。

こうした中で多くのキリシタンが棄教していく一方、浦上のキリシタンは秘かに信仰を継承した。しかし、長崎奉行の竹中采

表1 ザビエル以後のキリシタン史

発展の時代	1549（天文19）年 ザビエル来航
殉教と潜伏の時代	1614（慶長19）年 江戸幕府が禁教令発布 1633（寛永10）年 日本キリシタン教会組織崩壊 1644（寛永21）年 マンショ小西神父殉教 国内の神父が不在になる 1657（明暦3）年 大村にて郡崩れ 1660（明暦6）年 豊後崩れ 1661（明暦7）年 濃尾崩れ 1790（寛政2）年 浦上一番崩れ 1805（文化2）年 天草崩れ
復活の時代	1865（慶応元）年 信徒発見 1867（慶応3）年 浦上四番崩れ 1873（明治5）年 高札撤廃

（片岡弥吉『かくれキリシタン 一歴史と民俗一』（2014）に基づいて筆者作成）

女正による苛酷な取り締まりを恐れて山に潜伏する浦上のキリシタンもいた。浦川（1973：3-53）によると、このころの浦上キリシタンの信仰を物語るものとしてジワンノ、ジワンナ、ミギル親子3人の事蹟が残っている。彼らは本原郷に住んでいたが、ある日親子が家業に励んでいる中、息子のミギルが草刈りから帰ってきたときに親子3人が捕らえられた。3人は口に漏斗を差し込まれ、幾杯もの水を吐かせる拷問を受けた末に火あぶりの刑に処された。3人の亡骸は村民が貰い受けて殉教した場所に葬った。その場所は「ベアトス様の墓」と称され、代々村民の厚い崇敬を受けた。

3. 潜伏キリシタンの信仰

潜伏キリシタンの体系的な研究を行った片岡（2014）によると、禁教期に浦上のキリシタンたちには、カレンダーのように日繰りを行う「帳方」、生まれたばかりの子どもに洗礼を受け帳方宅に行き次週の祝日を聞き取る「水方」、水方から次週の祝日を聞き取り各戸に伝える「聞役」の3つの役職があった。ちなみに「帳方」は孫左衛門が浦上のキリシタンの頭目となって以来、ペドロ与右衛門、ジワン勘助、リース孫右衛門、パオロ圓吉、リース利五郎、ミギル吉蔵と七代200余年の間受け継がれた。歴代の帳方は中野郷の小字林に住んでいたことから「林の某どん」と仰がれていた。

浦川（1973）によると、浦上のキリシタンは四旬節（イースターの日までの40日間。悲しみの節とも呼ばれる）には断食を行った。御降誕（ナタラ）から66日目の水曜日を「入り」、「入り」から46日目まで前3日・後3日は種まきや裁縫等を禁じられた「上り」と呼んだ。しかし、ご復活の翌日は何を食べてもよいし、御絵や聖像などを取り出してよいとされた。御降誕の日の晩には聖母マリアへの祈祷文である「天使祝詞（ガラサ）」を150遍唱え、死者に「天ニ在ス

（まします）」を誦めるなど幾つもの習慣があった。他にもキリシタンではない人をゼンチョウあるいはクロベと呼んだ。また御親デウス様・御子様・聖霊様を御三品様と呼んだ。

ちなみに浦上のキリシタンにとって、西方に仰ぎ見られる岩屋山とそのさらに西方に見える外海の檜山は聖地であった。キリシタンは岩屋山に登って檜山の方角を向いてオラショ（ラテン語で「祈り」という意味。口頭で後世に継承された）を唱えた。「三度岩屋山に登るのは一度檜山に詣る、三度檜山に参るのは一度ローマに詣ることと同じ」だといわれていた。片岡（2014）によると、そこには西洋のローマから教皇の使者である宣教師がやって来ることへの切実な待望が示されていた。

4. 浦上の「崩れ」

このように潜伏して信仰を継承していた浦上のキリシタンたちも、江戸時代後期には「崩れ」と呼ばれる弾圧を経験することになった。浦川（1973）によると、1790（寛政2）年の「浦上一番崩れ」では寺町の大音寺の住職が秘かに坂本町の山王神社の神主に証拠を探らせた。そこで偶然平野宿の酒屋正蔵が発頭人となり、高谷永左衛門らが共謀して奉行所に密訴したことで19人の逮捕者を出した。しかし村人たちは「知りません。存じません」と言って白状しなかったため全員が叱り置きだけで釈放された。また村人は「キリスト教を信仰していません」という主旨の手紙を何度も奉行所に提出した。

1842（天保13）年の「浦上二番崩れ」でも逮捕者を出した。しかし一番崩れ同様「知りません。存じません」と言い張ったため釈放された。ちなみに浦上の「崩れ」に関しては、浦川（1973）が詳細な研究を残しているが、それによると「浦上二番崩れ」に関する史料はほとんど残っておらず、明

らかになっていない部分が多い。1856（安政3）年の「浦上三番崩れ」では相川宅助ら15人の逮捕者を出しただけでなく、吉蔵ら数人の刑死者も出した。他にもイツナシオ伝次郎、ペドロ龍平らが拷問を受けた末、全員獄死した。ちなみに浦上のキリシタンは聖地である檜山や平戸のキリシタンと秘かに連絡を取っていた。また浦上の戸主は「浦上三番崩れ」の後、奉行所で叱り置き措置を受けた。しかし三度の「崩れ」にもかかわらず浦上の潜伏キリシタンは信仰を守り続けた。

5. 大浦の奇跡「信徒発見」

幕府の開国政策によって長崎にも多くの外国人が居留するようになった。浦川（1973）および片岡（2019）によると、禁教令が発布されてから200年以上経過した1865（慶応元）年の1月、外国人居留者のために大浦天主堂が完成した。大浦のシンボルともいえる建造物が完成したにも関わらず地元住民が見物することは許されなかった。ちなみに献堂式はフランスのパリ外国宣教会日本教区長であったジラル神父の来崎が予定より遅れて2月に開催された。同年3月17日、地元の人に「フランス寺」と呼ばれていた大浦天主堂にて、ジラル神父によって長崎教区を任されていたプチジャン神父に浦上キリシタン十数人が信仰を告白した。その際に中年の女性が「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」「サンタマリアノゴゾーハドコ」と神父に尋ねた。その言葉を聞いたプチジャン神父は感動し、彼らをサンタマリア像の祭壇に案内した。この出来事はジラル神父に手紙で報告され、瞬く間に世界中に知れ渡った。この出来事を「信徒発見」と呼ぶ。信徒発見後に浦上キリシタンの中からカトリックに改宗する人が続出した。しかしそれが次の大きな弾圧事件につながる事となった。

6. 「浦上四番崩れ」という名の「旅」

片岡（2019）によると、1867（慶応3）年、浦上キリシタンの檀那寺である聖徳寺（現在の長崎市銭座町）の僧侶の立ち合いなしに死者を埋葬した、いわゆる自葬事件をきっかけに浦上キリシタンの68人が逮捕され、拷問の末に大半が改宗した。しかし翌年には、明治新政府によって浦上に対して大規模な摘発が行われた。その結果「一村総流罪」の措置が下されキリシタン3,394人が津和野や萩をはじめとした西日本各地の20藩に流刑され、遠くは名古屋や金沢などといった東海、北陸地方に流刑される人が多くいた。中には流刑先や移送中に命を落とす人も出た。流刑先では拷問や改宗を迫る内容の説諭を受けた人もいたが棄教する人は少なかった。特に津和野では冷たい池に投げ込まれた上に、「三尺牢」と呼ばれる90センチメートル四方の牢に監禁されたキリシタンもいた。遠藤周作の『女の一生』（1986）の登場人物の一人である清吉や『最後の殉教者』（1984）の登場人物の一人である甚三郎も津和野でこのような拷問を受けたキリシタンとして描かれている。この苛酷ともいえる出来事を知った欧米諸国は非難し、当時欧米諸国を訪問していた岩倉具視主権公使ら岩倉使節団は「キリスト教信者を虐げる国とは交流できない」と言い放たれた。この出来事が日本キリスト教史上に特筆される「浦上四番崩れ」である。5年後の1873（明治5）年、禁教の高札撤廃により浦上キリシタン2,905人が流刑先より帰村した。彼らはこの苦難の出来事を「旅」と呼んだ。

7. 「旅」のあと、そして原爆

「旅」が終わってから約50年後の1925（昭和元）年、「浦上四番崩れ」で流刑（旅）を経験した信者を中心に共同で出資した浦上天主堂が完成した。当時の浦上天主堂は東洋一のカテドラル（司教座聖堂）と称さ

れた。ちなみにカトリック長崎大司教区(2008)によると、浦上天主堂が建設されたのはかつて浦上の庄屋屋敷があった場所で、浦上のキリシタンはそこで絵踏みをさせられるという苦い記憶のある土地であった。

しかし20年後の1945(昭和20)年8月9日、原子爆弾の投下により浦上天主堂は壊滅した。それだけでなく、浦上に住んでいる約12,000人のキリスト教信者のうち8,500人が犠牲になった。しかし、生き残った浦上の人々はキリスト教の信仰を保ち続けた。原子野の中に焼け残った浦上天主堂の鐘を鳴らしてミサを挙げ、復興の歩みを始めたのである。そして廃墟となった浦上天主堂の跡地に1959(昭和34)年に新たな浦上天主堂が再建されたのである。なお、旧浦上天主堂の廃墟の一部は原爆落下中心地公園に移築され、被爆マリア像は浦上キリシタン以来の信仰の証として新しい浦上天主堂の内部に安置されている。

Ⅲ 浦上キリシタン関連史跡

このように近世以降も「キリシタンの里」であり続けた浦上には幾つものキリシタン関連史跡がある。それらはキリスト教の伝来から布教、弾圧、信仰堅持そして潜伏という苛酷な歴史の証であり、重要な意味を有している。しかもこうした史跡は、同時に原爆被災を物語る貴重な遺構とも重なっている。ここでは、キリシタン関連史跡の主要なものを取り上げ、その内容と現状について述べる。

1. サンタクララ堂跡

片岡(2019)によると、「サンタクララ堂跡」は、先述した通り1603(慶長8)年にポルトガル船員によって浦上川のほとりに建立されたサンタクララ教会があった場所であり、浦上のキリシタンの信仰の拠り所

となった。しかし1614(慶長19)年に江戸幕府の禁教令発布によって閉鎖、1620(元和6)年には破壊された。破壊されて以降は、浦上のキリシタンたちは跡地を秘密の教会すなわち祈りの場としただけでなく、キリシタンの結束の場としても活用した。

現在は国道206号線沿いに石碑と案内板が立っている。しかし国道沿いにあるにも関わらず、観光客らに素通りされてしまうなど観光地としてはほとんど注目されていない。



写真1 サンタクララ堂跡
(2021年6月10日 筆者撮影)



写真2 サンタクララ堂跡案内板
(2021年6月10日 筆者撮影)

2. 帳方屋敷跡

カトリック長崎大司教区（2008）によると、帳方屋敷には代々の帳方が住んでいた。「浦上三番崩れ」で刑死した吉蔵もその一人である。ちなみに現在は敷地内に如己堂があり、その傍らに帳方屋敷跡の石碑が立っている。帳方屋敷跡のみでは観光地としての知名度は低く、一般には如己堂として認知されている。

ちなみに如己堂はカトリック信者で医師の永井隆の住宅である。永井は原爆で妻を亡くし自身も被爆したが、『長崎の鐘』、『この子を残して』等の作品で有名である。妻は吉蔵のひ孫で旧姓森山緑である。永井は島根県生まれで長崎医科大学（現在の長崎大学医学部）進学を機に長崎に住み始めた。26歳のときに洗礼を受け、霊名をパウロと言った。卒業後は医科大学にて放射線治療に携わった。そして被爆後の長崎で医療活動に携わっていたが、原爆症に倒れ如己堂で二人の子どもと共に晩年を過ごしたのである。ちなみに「如己」とはキリスト教の隣人愛を示す言葉である。観光地として有名で観光客や平和学習で訪れる児童や生徒



写真3 帳方屋敷跡石碑
(2021年7月16日 筆者撮影)

がいるものの、キリスト教関連史跡としてはあまり知られていない。しかし、永井隆は浦上という土地に格別な愛着を持っており、自身のカトリック信仰も浦上キリシタンの長い歴史に続くものとして認識していた。そうした意味では、如己堂はキリシタンの歴史と原爆を結びつける貴重な史跡となっている。

3. 浦上天主堂

カトリック長崎大司教区（2008；2019）によると、建立前は村の政治に当たった庄屋の屋敷があり、そこでキリストを刻んだ銅版画の踏絵を踏む「絵踏み」が行われて



写真4 浦上天主堂
(2020年7月4日 筆者撮影)



写真5 拷問石
(2021年9月14日 筆者撮影)

いた。先述した通り、跡地に1925（昭和元）年「浦上四番崩れ」で流刑（旅）を経験した信者を中心に共同で出資した浦上天主堂が完成し、東洋一のカテドラル（司教座聖堂）と称されてキリスト教信者だけでなく、一般の人からも注目されるような建造物となった。ちなみに現在の天主堂は1959（昭和34）年に建立された。また聖堂の正面に「浦上四番崩れ」で棄教を迫る際に用いられた「拷問石」も残っている。寒空の下で若い女性が膝の上にそれを載せられる拷問を受けた話も残っている。

浦上天主堂の観光地としての注目度や評価は高く、訪れる観光客が多い。しかし、近くに大司教館があるなど長崎のカトリック教会の中心的な聖堂であるにも関わらず、浦上キリシタンの歴史と結び付けて捉える人は少ない。

4. 十字架山

カトリック長崎大司教区（2008）によると、「旅」を終えた信者が1881（明治13）年に信仰を表明できることに感謝して、イエス・キリストが処刑されたゴルゴタの丘

（イスラエルのエルサレムにある丘）に似た長崎市辻町の小高い山に十字架を立てた。十字架山には大きな十字架の周りに14の小さな十字架が立っており、イエス・キリストへの感謝の言葉や慈悲の言葉などが刻まれている。現在では周辺が住宅地になっており、道順が分かりにくくなっている。ちなみに山の購入には浦上出身の修道女である岩永マキも貢献した。マキは外海の出津教会の建立に尽力したド・ロ神父と共に篤志看護師の一員として、当時長崎地方で流行した赤痢の救護活動を行った。しかし観光地としての注目度は低く、宗教や歴史に特別な興味を持つ人や地元の信者以外に訪れる人はいない。

5. 本原教会

十字架山から東に本原教会がある。カトリック長崎大司教区（2008）によると、「浦上四番崩れ」の生存者が多い本原地区の信者は原爆で焼け残った建造物を仮の教会堂として、1959（昭和34）年からは一本木山（マリアの山とも呼ばれる。山には聖母マリアの像が置かれている）にできた修道院の



写真6 十字架山

（2021年9月27日 筆者撮影）



写真7 本原教会

（2021年9月21日 筆者撮影）

聖堂に行き、3年後に現在の教会堂を建設した。現在は市街地から離れた場所に位置し、遠方からはバスでしか行けない状況である。しかし、十字架山と同様に観光地としての注目度は低く、宗教や歴史に特別な興味を持つ人や地元に住んでいる信者以外に訪れる人はいない。

IV まとめ

日本のキリスト教史における特筆すべき出来事であるにも関わらず「浦上四番崩れ」やその関連史跡の一般的な知名度は低い。だが遠藤周作の小説『女の一生』や『最後の殉教者』に取り上げられるなど、文学やキリスト教史に関心を抱く人にはよく知られている。したがって、「浦上四番崩れ」を中心とする浦上のキリシタン関連史跡は、文学的かつ歴史的に観光活用できる大きな可能性を秘めていると考えられる。

今後は「浦上四番崩れ」関連史跡が直面している現状と課題を調査し、観光活用に有効な方法を検討する予定である。例えば多くの人に関連史跡を知ってもらうことの一環としてスタンプラリーの企画や、長崎さるくに「浦上崩れコース」を追加することには大きな効果が期待できる。また、遠藤周作のファンを対象に作品に登場した長

崎にある幾つもの舞台を巡る、いわゆる「聖地巡礼」を提案すれば多くの観光客が訪れる可能性があるのではないかと考える。これらの企画を契機として、長崎市のホームページや長崎観光の案内書などに「浦上四番崩れ」関連史跡を紹介する情報を増やしていけば、さらに大きな誘客が期待できるであろう。

参考文献

- 浦川和三郎（1927, 1973再刊）：『浦上切支丹史』国書刊行会，3-53頁。
- 遠藤周作（1986）：『女の一生1部 キクの場合』新潮文庫。
- 遠藤周作（1984）：『最後の殉教者』新潮文庫。
- 遠藤周作（1966）：『沈黙』新潮文庫。
- 片岡弥吉（1963, 2014再刊）「かくれキリシタン—歴史と民俗—」『片岡弥吉全集2』智書房。
- 片岡弥吉（2019）：「浦上四番崩れ」『片岡弥吉全集3』智書房。
- カトリック長崎大司教区（2008）：『ザビエルと歩くながさき巡礼』長崎文献社。
- カトリック長崎大司教区（2019）：『長崎遊学2 長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』長崎文献社，18-21頁。
- 木村勝彦（2007）：「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」『長崎国際大学論叢』第7号，123-133頁。
- 宮崎賢太郎（2014）：『カクレキリシタンの実像：日本人のキリスト教理解と受容』吉川弘文館。